福井県文書館講演

江戸時代の越前・若狭を旅した人々

青柳　周一*

はじめに
1．越前を旅した人々
（1）貞享2年（1685）貝原益軒『東路記』
（2）天保6年（1835）中井源左衛門光基『四番諸事日下恵』
（3）天保15年（1844）小津久足『志比日記』
2．若狭を旅した人々
（1）元禄2年（1689）貝原益軒『己巳紀行』
（2）文政3年（1830）作者未詳『西国巡礼略打道中記』

はじめに

ただ今ご紹介にあずかりました青柳と申します。私は江戸時代の旅行について研究しています。

江戸時代の人々というのは、盛んに旅行に出かけていて、旅先で得た知識や経験を書き残すということをしていました。その記録、いわゆる旅日記は現在まで非常に多く伝わっています。たとえば旧家の古文書調査に行くとかなりの確率で出てきますし、ちょうど文書館で展示されている福井の人の伊勢旅行記もそのひとつです（福井県文書館 勝見宗左衛門家文書「参宮のみやけ」(B0037-00297)）。

それではなぜ、江戸時代の人々は旅先で得た知識や経験を記録していたのでしょうか。単なる備忘録ではありません。そういった目的もなかったではないでしょうが、旅先で得た知識や経験を家族や地元の人々、さらには自分の子孫に伝えるということ、これが大きな目的だったのです。ですから、広い範囲への伝達や将来に向けての保存を目的に、写本も多く作成されています。

現在、我々が旅行に行くとなれば、雑誌やテレビ、インターネットなどで簡単に情報を手に入れることができます。でも江戸時代はそうはいきません。最も頼りになるのは、自分より前に同じ旅行目的地に行ったことのある人のお話、そしてその人の書き残した記録です。江戸時代に旅行の情報を得ようとすれば、出版物を入手して読むという手もありました。しかし、当時はかなり高い水準の出版物がすでに数多く出回っていましたが、現在ほど簡単に入手できるわけではありませんでした。

このように、江戸時代は旅日記が旅行の情報を得る重要な手段となっていました。ですが、旅日記が多く残っているといっても、そのほとんどは書いてあることが必要最小限の内容にとどまります。ですから、調査先で旅日記を見つけて、どんなことが書いてあるだろうと期待して開いてみても、単

＊滋賀大学経済学部教授

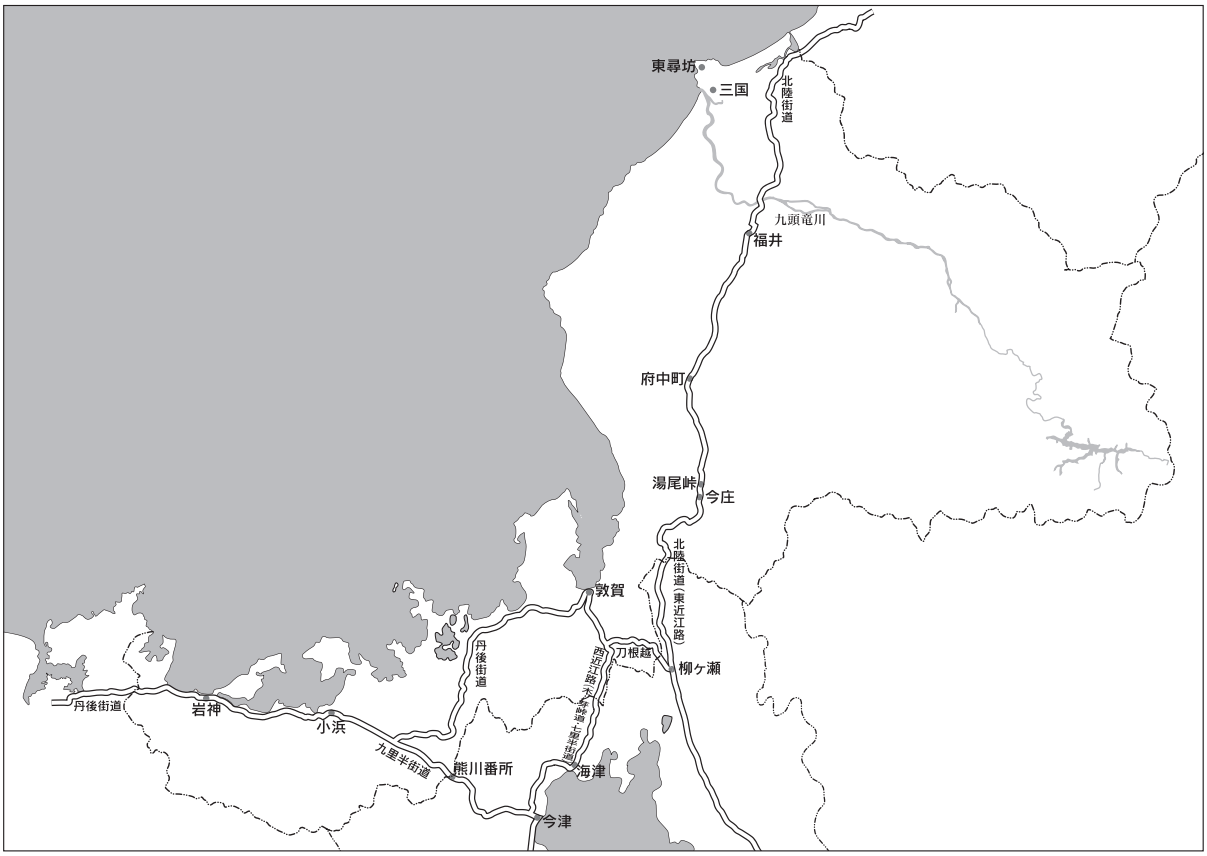

図１　本稿で取り上げる場所とその位置　（『福井県の地名（日本歴史地名大系 18)』平凡社、1981 年より作成）

に旅先で泊った場所の地名と費用しか書いてないということが多々あります。ただ、中には旅先で得た知識や経験を具体的に詳しく文章で伝えよう、さらには文学めかした作品をものしてみようとした人もいました。本日は、そのような詳しく具体的な記述のある旅日記や紀行文の中から、越前と若狭を訪れた人々のものをとり上げてご紹介します。地域の外からやって来た人は越前・若狭をどう眺めていたのか。名所や旧跡、伝説や伝承なども記録されていますので、旅行者はそれらをどのように受けとっていたのか、そしてどのように伝えたのか、といったことなどもわかってきます。江戸時代の越前・若狭を、当時の旅行者の目を通して少しのぞいてみましょう。

今回取り上げる地域は、北は東尋坊から西は岩神（いわがみ）まで、現在の福井県の全域に及びます（**図１**）。ただ、題材が旅日記や紀行文ですので、扱う場所は大きな街道沿いに限られます。具体的には、越前では北陸街道、若狭では丹後街道、この周辺になります。

１．越前を旅した人々

（１）貞享２年（1685）貝原益軒『東路記（あずまじのき）』

まずは越前の方から参ります。最初の旅行者は貝原益軒という人物です。この人の名前を耳にされたことがある方も多いかと思います。福岡藩に仕えていた儒者で、『大和本草』や『養生訓』、『楽訓』などをはじめとした実用書や啓蒙書をたくさん執筆しています。実は、彼は非常に旅行が好きで、全国各地を旅してまわっていました。そして紀行文を執筆しています。きちんと自分の足で訪ねて自

分の目で確かめて書いていたというわけです。それまでの紀行文というのは、和歌を詠みながら、歌枕を訪ねながら古典文学風の文章で記す、といったものが一般的でした。それに対して、彼の文章は説明が簡潔で情報量も豊富でしたので、出版されて実用的な旅行案内書として出回りました。いうなれば旅行ルポライターのはしりです。後でご紹介する小津久足（ひさたり）などにも影響を与えていて、久足の紀行文を見てみると、貝原益軒の本を参照せよといったことがしばしば書いてあったりします。

彼が記した紀行文の中に『東路記』という一冊があります。これは貞享二年、1685年に書かれたものです。その中から敦賀を訪ねた時の記述を紹介します（同書からの引用は、板坂耀子・宗政五十緒校注『新日本古典文学大系98 東路記・己巳紀行 西遊記』（岩波書店、1991年）による）。

〔敦賀と琵琶湖岸の諸浦〕

これは江戸時代の敦賀のようすです（**写真１**）。この図は享和三年、1803年に出版された『二十四輩（にじゅうよはい）順拝図会』という本に載っています。この本は親鸞とその弟子に関わる著名なお寺や旧跡を順番に参拝にする「二十四輩順拝」を図入りで紹介したものです。

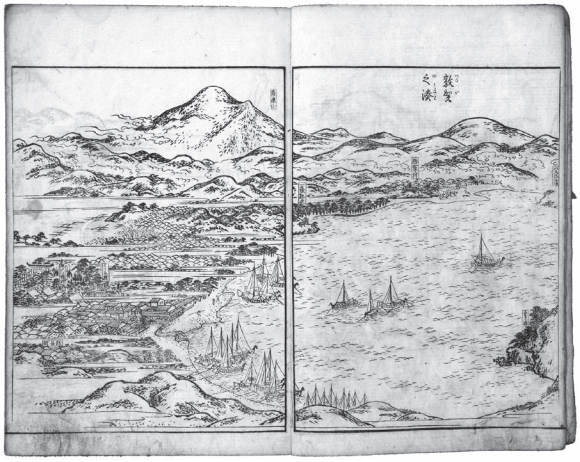

写真１「敦賀の湊」
（了貞著･竹原春泉斎画『二十四輩順拝図会』巻２、享和３年（1803）成立）（福井県立歴史博物館蔵）

貝原益軒は敦賀のことを次のように記しています。（引用史料は適宜読点と濁点を補い、助詞はひらがなに改めた。一部ルビも補い、注記は括弧に入れて施した。以下、全て同じ）

> 敦賀、北海の辺にある町なり。奥州、出羽、山陰道、すべて日本の北の海辺にある諸国より、船のつく湊なり。中について、秋田、坂田（酒田）、津軽、高田などの船多し。故に民家多く、とめる（富める）商人多し。米、大豆、材木など多し。かやうの物を是より京都の方へ人馬にてはこび、近江の貝津（海津）へ出し、貝津より船につみて大津へつかはす。（中略）町の東に、気比の明神（気比神宮）有。是、仲哀天皇の御廟なり。名社なり。社領百石。昔は千石つくと云。

貝原益軒によるこの説明は、現代の歴史学研究者の敦賀湊に対する認識とそれほど変わりません。敦賀が京都・大坂と北陸・東北間での流通の中継地であることが正確に表されています。さすが貝原益軒といったところでしょうか。

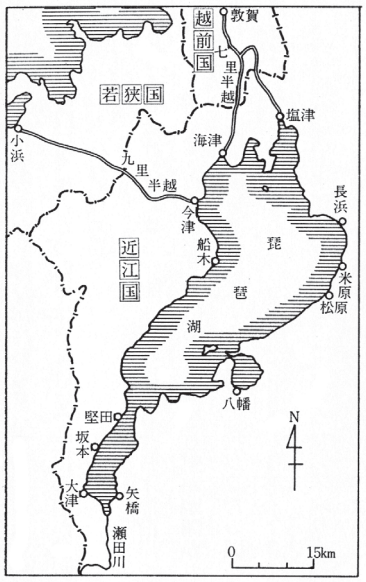

図２　敦賀と琵琶湖の位置関係
（『新修大津市史』３近世前期（大津市役所、1980年）より）

これは敦賀と近江の塩津・海津の位置関係を示した図です（**図２**）。江戸時代、敦賀には北陸・東北方面から大量の米や大豆が輸送されていました。北陸・東北方面の諸大名は領内で消費する以外の米や大豆を京都や大津で売却していて、その中継地が敦賀だったのです。船で敦賀まで運んできて、敦賀で陸揚げして馬に積み替え

る。そして馬で山を越えて近江国に入り、海津や塩津などの湊に行く。そこで再び船に積み替えて大津まで運び、大津でまた陸揚げして陸路京都へ向かうというルートです。

当時、大量の荷物を最も短時間で輸送できる手段は船でした。琵琶湖は近江国を縦断するバイパスだったといえます。これを利用した物資輸送のルートができ上がっていて、その拠点のひとつが敦賀だったのです。

物資輸送ルートの重要拠点であった敦賀は、先ほどの図のように非常に繁栄するのですが、西廻り航路が整備されていくと次第に入津量が減ってきます。西廻り航路は下関を回って瀬戸内海から大坂に行くというルートですが、こちらの方がコストを抑えることができたのです。西廻り航路が安定し始めるのは17世紀の末頃ですから、1685年はちょうどその前後です。貝原益軒が見た敦賀は全盛期の最期のあたりだったといえるでしょう。

（２）天保６年（1835）中井源左衛門光基『四番諸事日下恵（ひかえ）』

次の旅行者は近江商人です。中井源左衛門光基（みつもと）という人物が書いた『四番諸事日下恵』（滋賀大学経済学部附属史料館所蔵）という旅日記をご紹介します。みなさん中井源左衛門はご存じでしょうか。近江八幡からさらに内陸に入った蒲生郡日野というところを本拠としていた中井家は、近江商人の中でも最大級の経営規模を誇った家でした。この中井家の４代目当主が源左衛門光基（光茂、正治兵衛、石翁）です。

近江商人というのは、近江国の外に出かけて行って、他国稼ぎをします。出かけて行った先は関東・東北が多く、中井家の場合、その中心となったのは仙台でした。仙台などに店を構えて現地の商人と取引をします。京都や大坂から古手（古着）や繰綿を持って行って卸売をする。そして生糸や紅花、青苧（あおそ）といった東北地方の特産物を仕入れて、江戸や上方などで売るという商売です。仙台以外にも、石巻や相馬、天童などに多くの出店を設けています。そして、そこからさらに枝店ができていって、中井家の商売網が形成されます。ただ、商売の規模が大きくなると、各地の出店の経営監督が肝心になってきます。当時は電話もメールもありませんから、近江からでは監督しきれませんので、現地へ実際に行くしかありません。そのため、中井源左衛門はしばしば各地の出店回りに出かけていました。

天保六年、1835年の源左衛門光基による旅の記録が『四番諸事日下恵』です。旅のルートは、日野を出て中山道、北国街道を通って柳ヶ瀬へ。柳ヶ瀬からはおそらく刀根越を通って敦賀に入ったのでしょう。そして越後まで北上し、そこから本州を横断して太平洋側へ出ます。そして奥州に向かいます。この旅の間、越前から越後までは比較的気楽な観光旅行といった雰囲気でした。

〔常宮神社と気比松原〕

まずは５月７日の記事で、敦賀です。

> 常宮へ船にて参詣、船路但し二里余、尤酒肴持参、船中にて給（たべ）、着岸之上参詣、拝殿にて又々酒取出し、泉蔵坊（社僧）へ参り昼飯給、壱人前百文之割、外に茶代弐百文差置、夫より引取かけ、一夜之松原（気比松原）前にて引網為致、則三度為引候処、色々小魚・かれ（かれい）・きす・小鯛等有之、直々料理、又々酒相初候事、網引代五百文

初めに船で常宮神社に参詣しています。船の上ですでに一杯、そして神社でもまた一杯と、お酒を飲んでいます。続いて泉蔵坊という社僧の所で昼食をとっています。料金が一人前100文と決まっていますので、泉蔵坊では参詣者向けにそのようなサービスをしていたのでしょう。茶代200文というのは現在でいうチップです。

気比の松原では、松の風景を楽しむ前に地元の漁師に網を引かせています。そして、そこで獲れた魚でまたお酒を飲んでいます。ここでも地元の漁師が代金を取って旅行者向けのサービスをしていたようです。

〔福井城下～愛宕山見物〕

続いて福井へと進んで行きます。福井へは５月９日に到着するのですが、敦賀から福井へ行く途中に通った府中町（越前市）のようすも記しています。

> 福井高島屋へ七ツ時前着泊、今日通行之道々、府中は福井御家老弐万五千石（実際は二万石）之御在所なれど、家数弐・三千も有之由にて、至極繁昌之土地、鍛冶や抔夥敷（おびただしく）、女郎や抔立派之女郎や数軒有之、中々場所柄也

福井には七ツ時（午後４時頃）に到着したのだが、その前に通過した府中は福井藩国家老本多氏の城下町で、家数が2000～3000もあろうか（天保九年（1838）段階で2431軒）、非常に繁盛していて、鍛冶屋がたくさんあった。これは越前打刃物のことです。当時から有名で、鎌や包丁が旅行者用の土産として販売されていました。このように特産物についてもきちんと触れています。立派な女郎屋もあったと言っています。

そして福井城下に入ります。

> 又福井御城下も中々繁花之土地にて、家数之弐万も有之由にて賑々敷（にぎにぎしき）土地（中略）扨（さて）福井高島やへ参着之上、案内者相頼、先づ愛宕山（足羽山）へ参り候処、どこを当て共も無連歩行候間腹立候侭（まま）引取、宿之亭主へ相咄候に付、亭主直々案内同道、愛宕一山所々見物、数多遊参人有之、賑々敷事、夫より誓願寺へ降り、夕方宿へ引取、此誓願寺と申は役者・芸者等之住居致居候所也

福井城下もやはり繁盛している。家数は府中よりさらに多く２万もあろうか、さすがに賑やかな場所だと言っています。福井では高島屋という旅籠に泊まっています。そこでガイドを頼んでいるのですが、当てもなく歩かされただけで面白くなかったと腹を立てています。それを旅籠の主人に伝えると自らガイドを買って出てくれて、その主人に愛宕山に連れて行ってもらっています（**写真２**）。遊山人が多く賑やかな中、愛宕山を歩いて、その後は愛宕山の裏手にあった誓願寺町に寄っています。誓願寺町というのは一風変わった町で、芸者や役者、娼妓などが集まって住んでいました。福井で唯一の遊郭があり、芝居の興行もここで打たれていました（『福井県

写真２　「愛宕山眺望図」　（福井市立郷土歴史博物館蔵）

史 通史編４近世二』1996)。愛宕山、誓願寺と城下の遊び所を回ってきたということでしょう。

〔当時の愛宕山参詣の様子〕

文化十二年、1815年に書かれた井上翼章『越前国名蹟考』という本に「足羽参記」という文章があります。これが当時の愛宕山での物見遊山の雰囲気をよくとらえています（杉原丈夫編『新訂越前国名蹟考』松見文庫、1980年による)。

> まつ（まず）松玄院の桜寿命院の柳をなかめ、足羽御社に渇仰す。（中略）羽明明神に参り、勝軍地蔵（愛宕大権現）に詣て絵馬をかそへ、煙草を吹、楊弓屋か塩梅よしの田楽に舌鼓をならし、滅多的のねらひに片目を塞くもおかし。月見山八畳鋪茶臼山の眺望に、近くは官府の甍を仰き、遠くは三国の孤松を見遣（中略）天魔か池の卯花も頓て時鳥を待比なるへし

松玄院の桜や寿命院の柳を眺めながら登っていくと足羽神社がある。さらに登っていくと羽明明神、そして愛宕大権現があり、このあたりには出店も軒を連ねている。ここまでくると眺望がよく、福井城の天守や遠くは三国の松まで見える。当時の愛宕山は、見てよし。遊んでよし。食べてよしの、旅行者も多く訪れる名所でした。

〔九頭竜川～三国・東尋坊〕

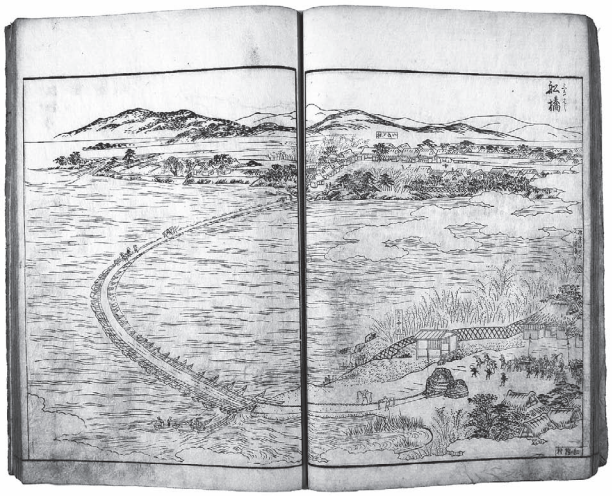

写真３　「舟橋」　　（前出『二十四輩順拝図会』）

福井を出た後は舟橋村の方に行っています。この時、中井源左衛門は三国へ向かおうとしていました。三国へは足羽川からも行けたのですが、舟橋村へは、舟を鎖で繋いで橋にした九頭竜川の名物である舟橋を見に行ったのでしょう（**写真３**）。旅日記にも詳しく書いてあります。

> 舟橋迄陸参り、舟橋一見、扨はや見事之橋にて、何様北国一番之橋にも可有之か、川巾弐丁余船四十八艘つなぎ、其上へ巾一間程に板を渡し候もの也、船は岸より岸へ大丈夫之鉄之くさり（鎖）にてつなぎ有

48艘の船を頑丈な鎖で繋いで、その上に板を渡して橋にしてある。北国一番の見事な橋だといっています。

> 扨右橋渡り森田にて小船一艘借切、代七匁、段々川を乗下り候（中略）三国鶴田屋へ八ツ時着泊、但し川之里数七り也、直々案内者相頼、代百文也、唐人坊（東尋坊）へ見物に参る、一里余、道にて海士三人相頼、代三匁、唐人坊にて魚類為取候処、あわび大小五、さゞい（サザエ）大小九ツ、雲丹壱ツ、なまこ一ツ取参る、是能々楽也、帰りがけ浜之塩湯にて右為取候あわび為料理酒給

それから、舟橋を渡った森田というところで舟を借りて、その舟で九頭竜川を下りながら三国に入ります。三国では鶴（鶴）田屋という旅籠に泊まり、ここで有料のガイドを雇って、東尋坊を見物に行っています。そして東尋坊で出会った海士にあわびやサザエなどを獲って来てもらって、それらを肴にまたお酒を飲んでいます。海のない近江国から来ていますから、海産物が珍しかったのかもしれません。

（3）天保15年（1844）小津久足『志比日記』

次は小津久足という人物です。彼は伊勢国松坂の人で、中井源左衛門と同じく商人でした。江戸に店を構える大手の干鰯問屋である湯浅屋与右衛門家の６代目当主です。干鰯というのは鰯を加工した肥料です。小津の家は領主である紀州徳川家の御用商人を務めるほどの大商家だったのですが、彼自身は旅行や文芸を非常に好んでいました。中井源左衛門も旅行を楽しんでいましたが、彼には出店の監督という目的がありました。いっぽう、小津久足は旅行や文芸そのものが好きだったようで、生涯で50点あまりの紀行文を残しています。何度も何度も旅をしていないとこれだけのものは書けなかったでしょう。商売の方は大丈夫だったのかと心配になるほどです。彼は滝沢（曲亭）馬琴の友人兼パトロンのひとりでもあり、馬琴に自分の書いた紀行文を読ませたりもしています。反対に馬琴の作品を批評することもあったようです。ちなみに、映画監督の小津安二郎の生家は、この久足の小津家の分家にあたります。

ご紹介するのは天保十五年、1844年に書かれた『志比日記』（無窮会専門図書館所蔵・神習文庫）という紀行文です。この年の２月25日に松坂を出て、まず京都へ行きます。そこから近江に入って湖西地方へ向かいます。そして北国海道（西近江路）から七里半越で越前へ、そこから北陸街道（東近江路）を通り、さらに目的地の永平寺や吉崎、三国などへと向かっていきます。

〔湯尾峠の孫嫡子〕

彼はこの時に湯尾峠を通っていますので、はじめにその部分をご紹介します。小津久足の文章は平仮名が多用されていて読みにくいので、読みやすいように一部を漢字に直すなど改めました。

> （３月16日）四・五丁も登れば峠にて、湯尾峠ということも太平記に見えたり、茶屋に入て憩うに、ここの茶屋はいずれも見世に疱瘡神なりとて神棚めくものを作りて、そのほとりに御孫嫡子の文字を赤く紺地に染めたる暖簾をかけ、守をも出すと言えり、ここなる疱瘡の神のことは世人もよく知りて名高けれど、わが子にいまだ疱瘡病まぬがなかりせば、なまもの知りの癖にて、怪しの伝え、取るに足らずとひたむきに言いくらすべきを、初子（文政十一年（1828）出生の長女か）にいまだ疱瘡病まぬか（ママ）かれば、心弱くもつと（土産）にとて、守を十二銅にて求めたるは、

写真４　「湯尾峠」　（前出『二十四輩順拝図会』）

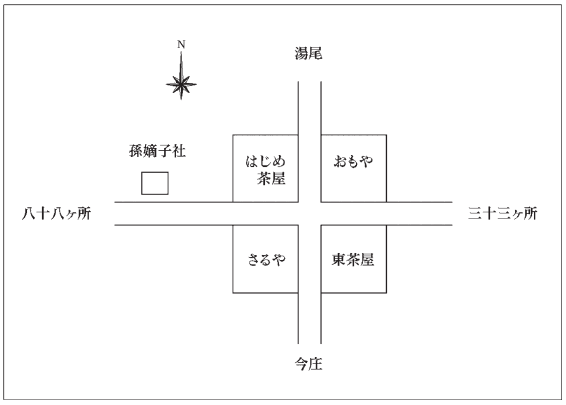

図３　湯尾峠の四軒茶屋
（杉原丈夫「湯尾峠孫嫡子考」（『福井県立歴史博物館紀要』第１号、福井県立歴史博物館、1985年）より作成）

心の病みと我ながらおかし

太平記にも出てくる湯尾峠。当時、湯尾峠には「おもや」「さるや」といった屋号の４軒の茶屋がありました（**写真４・図３**）。その４軒の茶屋はどこも疱瘡神を祀る神棚を作って、その横で孫嫡子と書いたお札を売っている（**写真５**）。孫嫡子というのは疱瘡の神様で、疱瘡にかかっても重症にならないためのお守りとしてこのお札が売られていたのです。ここでいう疱瘡とは天然痘のことです。孫嫡子信仰は貞享四年（1687）の井原西鶴『男色大鑑』や『二十四輩順拝図会』など文芸作品や出版物で取り上げられ、当時の社会に広まっていました（『福井県歴史の道調査報告書第２集　北陸道Ⅱ・丹後街道Ⅰ』2002、前出杉原丈夫「湯尾峠孫嫡子考」）。小津久足はこうした話に懐疑的だったようなのですが、まだ天然痘にかかっていなかった子どもがいたので、迷信と思いつつもやはり心配だったのでしょう、12銭を払ってお守りを購入しています。

写真５　孫嫡子守り札
（前出杉原論文より）

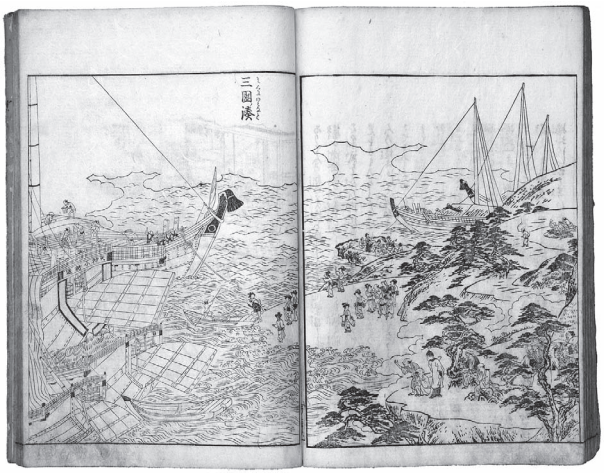

写真６　「三国湊」　（前出『二十四輩順拝図会』）

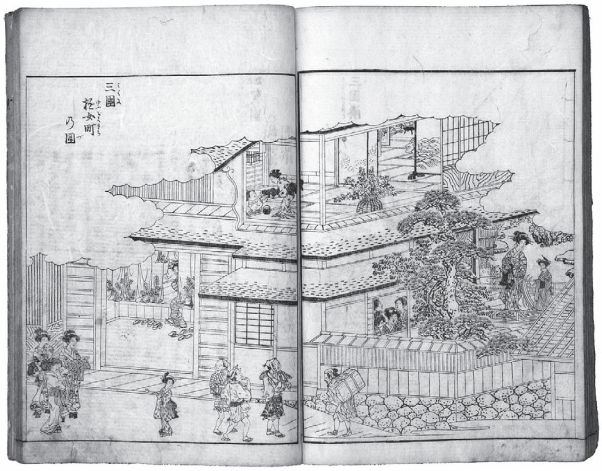

写真７　「三国遊女町の図」（前出『二十四輩順拝図会』）

〔三国の遊女屋と瀧谷寺〕

彼は三国へも足を延ばしています。中井源左衛門も三国へ行っていましたが、当時、三国には遊郭がありました（**写真６・７**）。

（20日）三国の湊の塩見橋（汐見橋）と言うに船果てたれば、岸に上がり五丁ばかり行きて、鶴田屋何がしと言う者の家に宿れるは申の刻ばかり也（中略）ここの世に名高きは遊女あるからのことなれば、その様見まほしくて宿の主に語らえば、たちまちその由言いやりけん、朱の紋付きたる挑灯ともせる小女が迎に来たれば、そを伴いて向かいの方なる松尾屋何がしと言う楼に登れば、家作りさすがに仮初めならず、田舎びて田舎めかぬ様あり、燭まばゆきまで掲げて、家刀自が木綿の衣に前垂と言うものかけたるままに慌ただしく出で来たりて、その年頃は五十ばかり、かく肥あぶら付きたるを強いて女々しく繕いて、慣れ慣れしく打ち語らう詞付きのおかしさ、思わず笑壺に入ぬ

小津久足も中井源左衛門と同じ鶴田屋に泊まったようです。そこで宿の主人に有名な三国遊女を見てみたいものだというと、さっそく迎えがきて遊女屋へと案内されています。案内された遊女屋は大きいところだったようで、都から遠く離れた場所にありながらとても田舎とは思えない立派なものと評しています。さすが三国と思っていたら、そこで出て来た女将は大変ふくよかなのに細々した仕草をし、かと思えば馴れ馴れしく話しかけてくる。小津久足にはそのようすや言葉使いが大変おかしかったようです。

翌日には、久足は瀧谷寺へ行っています。

（21日）瀧谷寺と言うに詣ず、禁殺生の制札たち、摩尼宝山と泊如僧正が書きたる（貞享四年（1687）、智積院第七世瑞応泊如運敝の筆）を彫りたる額かかりて、所に合わせては大寺なり（中略）その堂に並びて観音堂もものふりたり、この寺は泊如僧正が額あれば新義（新義真言宗）ならんと思いて、僧に問えば、さなりと答う、庭に糸桜の大樹三本ばかり有て、春のさまおもひやらる

瀧谷寺では、「摩尼宝山」と彫られた立派な額がかかっていました。その額に「泊如」とあったので僧に新義真言宗かと問うと、さようと答えが返ってきました。瀧谷寺は京都醍醐寺報恩院末（後に智積院末）で、越前の新義真言宗寺院の中心的存在でした。さらに庭の「糸桜」にも触れています。この糸桜というのはしだれ桜で現在は3代目になるそうですが、彼が見たのは初代であり、三国節にも「西も東も南（皆見）に北（来た）か三国瀧谷糸桜」と出てくる名木です。

2．若狭を旅した人々

（1）元禄２年（1689）貝原益軒『己巳紀行』

〔小浜城下と「八百比丘尼伝説」〕

次は若狭に参ります。ここでもう一度、貝原益軒が登場します。元禄二年、1689年に書かれた『己巳紀行』の中の八百比丘尼のお話です（同書からの引用は、前出『新日本古典文学大系98』による）。

小浜は当国の主、酒井氏の居城也。昔年、京極氏築けり。小浜の町の西南三里計前の、高き所に社有。熊野山と号す。本社は神明也（神明神社、小浜市青井）。其少西の方に、役小角の像有。脇社に、白比丘尼又号八百比丘尼十八歳の影有。（中略）八百比丘尼の事、伝にいはく、古へ、此辺に六人の福徳長者あり。時々参会して、宝物をくらべ争ふ。食膳も亦、珍奇を尽す。在時、海錯の中に人魚を料理す。五人の者は人魚をしらず。あやしき物とて不食之。其中の一人、人魚の肉五六片、懐之にして家に帰り、妻子に見せて捨んと思ひ、隠し置けるを、一人の女子、人魚は薬なる由を聞及び、窃に取て食しける。是より長命にして、八百年、此所に住スとかや。

はじめに小浜の説明があります。当時、酒井氏がいた小浜城は、かつて京極氏によって築かれたものである。小浜の町の西南に神明神社があって、そこから少し西に行くと、有名な修験者役小角の像が建っている。そして、その脇に八百比丘尼の18歳の時の像が建っている。

続けて八百比丘尼伝説が紹介されています。むかし６人の福徳長者がいて、集まっては宝物を自慢し合っていた。ある日、長者たちの宴会に人魚の肉が出てきた。６人のうち５人は人魚を知らなかったので食べなかったが、１人は人魚を知っていたので、家族に見せようと数切れを持ち帰った。それ

をその家の女の子が食べてしまい、800年生き続けたという話です。

現在、小浜の空印寺に八百比丘尼が入定を遂げたという洞窟がありますが、女性が人魚の肉を食べて800年の長命を保ったという「八百比丘尼伝説」は全国各地に伝わるようです。高橋晴美さんによれば、「八百比丘尼伝説」は全国28都県89区市町村121ヶ所にわたって分布しており、伝承数は166に及び、とくに石川・福井・埼玉・岐阜・愛知に多いそうです。埼玉・岐阜といった海のないところも含まれています（高橋「八百比丘尼伝説研究」、『東洋大学短期大学論集　日本文学篇』18、1982）。伝説自体ははるか中世に遡るもので、それが江戸時代に入って全国に広まっていったのでしょう。

（２）文政３年（1820）作者未詳『西国巡礼略打道中記』

これまでの旅日記や紀行文は作者がわかっているのですが、次のものは作者が未詳です（巻末に「吉田屋正六主」とありますが、作者ではなく所持者と考えています）。文政三年、1820年に書かれた『西国巡礼略打道中記』（舞鶴市教育委員会所蔵・糸井文庫）というもので、舞鶴の糸井文庫の中にあります。現在は上下巻のうち上巻はなく、下巻だけが残っています。最後は大坂に帰り着いているので、作者は大坂に在住していた人物と思われます。西国三十三所巡礼の旅日記なのですが、交通に関する記述が非常に細かく、旅行案内として用いられることを強く意識して書かれたようです。実際に貸本として流通していた形跡もあります。

〔岩神の「おんじく石」〕

この『西国巡礼略打道中記』は、文章に特徴があります。口語体に近い文体で書かれていて、あたかも当時実際に話されていた言葉をそのまま記録したようです。この中から大飯郡高浜町岩神の「おんじく石」を見てみましょう。

▲いわがみ（岩神）　●こくぞぼさつ（虚空蔵菩薩）ト申て、大きないわがある、夫を小供がかなづちでかじりとりにして、此くらい（図あり、省略）ニいたして、子供が大ぜいしてめいめいに、一もん（文）じや、かわんせかわんせト申てやかましく申、是を見れバ四畳半もあるどう（堂）の内らに、大きないわがある（中略）そのいしをバかなづちでかぢりとりニいたして、一文づつでうるなり、是ハづつう（頭痛）のいたすおり、ひでぬくめて（火で温めて）、いたむ所へあてるなり、又はらいたのせつ（腹痛の節）ハ、ぬくめてきれでつつミて（包みて）あてるトなをる（治る）ト子供が申候

岩神という村のお堂に、虚空蔵菩薩といわれる巨大な岩がある。それを子供たちがかなづちで削り取って売り歩いている。岩の破片を温めて痛むところにあてれば痛みが治まるらしい。つまり石を利用した温灸療法です。「おんじく」を漢字にすると「温石」になります。

実は、このお話は延宝年間（1673～80）に書かれた『若狭郡県志』にも出てきます（原文は漢文）。

温石　岩神村の傍に巨巌有り、岩神と称す。是温石也。之を得んと欲せば、則ち他石を以て代と為し、此の所に置き、而して巨巌を砕き之を採る

この頃は、岩を削る前によそから石を持ってきて、代わりに置いていたようです。しかし文政の頃になるとすぐに岩を削るようになっていて、それが子供たちの小遣い稼ぎになっていたようです。旅行者が多く行き来する街道筋ならではの動きがみてとれます。

〔熊川番所の女改めと通行の様子〕

最後は熊川番所です。熊川番所は『西国巡礼略打道中記』に描かれていて、現在復元されている熊川番所はその図が元になっています（**写真８**）。熊川番所は小浜から近江国今津へ至る九里半街道にあった番所のひとつで、小浜藩が交通を管理するために置いていた口止め番所です。九里半街道は、西国三十三所巡礼では松尾寺（29番）から宝厳寺（竹生嶋、30番）へ向かう道にあたります。

熊川番所は女性の通行改めが厳しいことで有名でした。貝原益軒も『己巳紀行』に「女をとどむる関所あり」と書いています。明和四年（1767）『稚狭考』にも、「本国に女の旅行を制禁あり（中略）本国は出るを禁じて入を禁せられず」とあります。この『道中記』には番所を通行する際の想定問答が記されているのですが、西国三十三所巡礼の中には女性も多くいましたので、とくに女性がスムーズに通過できるようにと考えた内容になっています。

▲くま川　〇ちうじき（昼食）、やどや小休、見れハ此所ハ中此出口が、女あらための御ばん所あり（中略）まづ、で口（出口）の女あらためのかたち、此所ハ木戸口が一ツある、此内よりさむらいか、又は丁人（町人）か、百姓か、とんととんとすだれ（簾）がかけて、内らハまつくらがりて、わかり不申候、是をバしらずにゆくと、此すだれの内より、こりやこりやとよびとめるト、下ニいよト申

写真８　熊川番所
（『西国巡礼略打道中記』（舞鶴市教育委員会蔵・糸井文庫））

「中」というのは、『道中記』の作者による熊川の評価です。一般的な宿場町だということです。熊川番所には木戸口がひとつあって、簾がかかっている。番所の中は暗くて人がいるかどうかわからないが、通ろうとすると中から「下にひかえろ」と声がかかります。声がかかっても、暗いので相手は武士か町人か百姓かわからない。このあと、想定問答が始まります。旅行者は男女二人連れということになっています。

▲そのほうハどれへとふる（通る）、此所ハ御ばん所じやが、いづれへとふるトたずぬる

▲ハイ、わたくしどもハ西国（西国三十三所巡礼）でござりますト申

▲国ハどこじやト申

▲ハイ、国は津の国（摂津国）でござりますト申

▲どなたの御下じやト申て、なハなんト申トいふ

▲ハイ、大坂でござりますト申て、御奉行の名を申なり

▲国ハイつぅ立たト申

▲ハイ、国ハ何月何日ニ立ちましたトいふ

下にひかえると、番所の簾越しに「どこへ行くのだ」と聞かれます。それに対して「西国三十三所巡礼です」と答えると、続けて生国を聞かれます。作者が大坂の人ですので、ここでは大坂を例に挙げて「津の国」（摂津国）と答えています。さらに領主の名前を聞いてきますので「大坂です」と答えて、大坂町奉行の名前を言います。そうすると「何月何日に出発したのだ」と聞かれるので、「何月何日に出発しました」と答えます。（以下の史料中の「なまりて」などの書き込みは原文ママ）

▲どれから札ハうぅち（なまりて）はじめたトいふ

▲ハイ、札ハどれからうちはじめましたトいふ

▲なんぅ人（にん）のつれじやトいふ

▲ハイ、なん人（にん）のつれでござりますトいふ

▲その女ハトいふ

女づれと同行なれバ同行何人、又女房なれバ女房ト申なり

▲ハイ、これハ同行でござります

▲みな同国（どうこく）かト申

▲ハイ、同国でござりますト申

次にどこから札を打ち始めたかと聞かれます（「札打ち」＝参詣者が寺院の壁や柱に札を打ったり貼ったりすること。納札とも）。「なまりて」というのは、こんなイントネーションの言葉で聞かれるから気をつけろということです。巡礼はお参りしたお寺に札を残していきますので、「どこから札を打ち始めたのか」というのは「どのお寺から回り始めたのか」ということです。お寺の名前を答えると、何人連れかと聞かれます。「なんぅ人」というのは、これもお国なまりでしょうか。人数を答えると、今度はその女性は同行者か妻かと聞かれます。ここでは同行者と答えています。同行の場合はさらに同国の者かと聞かれますので、同国ですと答えます。

▲手がたハもつておるかト申

▲ハイ、手がたハ持参いたしておりますト申ト

▲是へだせト申

▲ハイ、ト申てくわい中（懐中）よりだすト

すだれの内からておだしてとる（手を出して取る）ト

▲あらためているト見へる、しばらくひま（隙）がいりて、夫よりすだれの内よりそとへだして

▲これにそうイ（相違）ハあるまい、とふれ（通れ）といわずに

▲とうるであろうト申なり

▲ハア、ト申て夫より同行みなみな出立いたすなり

続いて「往来手形は持っているか」と聞かれます。「持っている」と答えると「これへ出せ」と言われます。それに従って懐中から出すと、簾の中から手が出てきて中で改められます。そのまましばらく待っていると、簾の中から手形が返されて通行を許可されるのですが、「通れ」といわずに「通るだろうな」という言い方をされます。こうして、ようやく番所を通過することができます。

当時、熊川番所を通行する際にはこのような取り調べがありました。こうして熊川を通り、ようやく若狭から近江に出ることができたようです。ちょうど若狭を出たところで、この講演も終わりたい

と思います。

ご静聴ありがとうございました。

〔付記〕本稿は2013年（平成25）７月13日に、福井県立図書館多目的ホールで行なわれた講演会「江戸時代の越前・若狭を旅した人々」の講演録を加筆・修正したものです。